

## 国立駅周辺まちづくりに関する要望書

⑮平成20年1月21日「要望書 そう遠くない未来の市民のために」  
えき未来くにたち

15



要望書 そう遠くない未来の市民のために

平成 20 年 1 月 21 日

国立市長 関口 博 様

国立駅周辺まちづくり推進協議会会長 北澤 猛 様

委員 様 各位

えき未来くにたち 代表



写真はほぼ半世紀前の国立駅前風景です。…この時代に、現在の国立駅前を果たしてどれだけの人が想像できたでしょうか？

今の幼い子どもたちやこれから生まれてくる子どもたち、つまりは 50 年後の市民が、歩いて・眺めて・使ってみて、「他にはない我が家のような親しみを持てる駅と駅前で良かった！」と感じるような駅および駅周辺づくりをお願いします。

今から 1 世紀近い過去に箱根土地（現・プリンスホテル）の堤康次郎と東京商科大学（現・一橋大学）の佐野善作は理想の住宅地としてこの地に白羽の矢を立て、住む人々が喜ぶような町と駅前広場を構想しました。学園を中心に置く配置や大学通りの景観をはじめ、未だ失われない国立のまちの個性と魅力を創り出した先見性は刮目に値します。

既に6回を数える国立駅周辺まちづくり協議会の作業部会を先日も傍聴させて頂きましたが、このまま進めて果たして将来多くの市民が喜ぶような駅周辺につながるのだろうかと気懸かりです。些末な事象へのこだわりや個別の利害に囚われない姿勢を保ちながら、遠い将来を見据えつつ、具体的な内容を掘り下げる活発な議論を期待した市民としては深く落胆させられます。

50年後の気候変動、まちの人口、車を取りまく状況はどうなっているのでしょうか？

50年後の働き方や通勤通学のかたちはどのように変わっているのでしょうか？

50年後も水や電気をふんだんに使える時代が続いているのでしょうか？

50年後の幸福感を達成する価値基準はどのように変化しているのでしょうか？

財政厳しい条件下にあっても、未来のまちが衰亡することなく、暮らしやすい環境とアメニティを実現するような駅周辺はどうあるべきかを議論するなら、もっと現状を俯瞰的に捉える視点が必要ではないでしょうか。未来への投資を大胆に行う格好の機会と考えられる部分については思い切った判断が望まれます。

JRとの協働による整備を検討の軸に据えるのは結構ですが、いたずらに商業主義に偏る開発や単に予算を低く抑えることのみを目的とする手段であってはならないでしょう。そのJR東日本という企業の本来性、将来像をも本質的に捉え、主張すべきは主張し提言すべきは提言することで新たな展望が開けることもあり得ます。

今日グローバル化の潮流にあって日本も急速に変化しつつあります。環境をキーワードにとっても同じことが言えるでしょう。また防災を考えても駅関連施設の防災拠点としての可能性は決して小さくないと思われまます。

近年各地の駅周辺の再開発等で複合施設が整備される例を散見しますが、商業、公共、医療、スポーツなどの機能が一つのハコに納まるに止まっているのが実態です。利用する市民の視点で見ると個々の施設が有機的につながり一体化して初めて複合としての意味を持つのではないかと感じます。国立駅周辺については是非とも前例のないような、将来の市民から「先見性」を評価されるような計画をお願いしたいと思います。

国立のまちづくりの原点に立ち返り、百年後を見据えた夢と先見性のあるプランを要望します。

田園風景を活かした学問と芸術の香り高いまちの玄関として、訪れる人々をおもてなしの心で迎えることのできる駅周辺まちづくりを要望します。

そのためにも協議会と事務局が一丸となって努力して頂き、委員各位は最大限に想像力を働かせてこの問題に取り組んで頂きたいと思ひます。

50年後の市民が凝視しています。